

やく橋はやけにけり、
水の上への濱名の橋も焼にけり打磯波やよりこざりけん

〔いほぬし〕はまなのはしのもとにて

人えれずはまなのはしのうちわたし歎ぞわたるいくよなきよを

はしのこぼれたるを

中絶てわたしもはてぬ物ゆへになに、はまなの橋をみせけん略○中

なをいで、十一日、はまなのはしのもとにとまりて、月のいとおもしろきを見侍て、

うつしもて心えづかにみるべきをうたても浪のうちさはぐかな

〔枕草子十二〕ある女房の遠江守の子なる人をかたらひてあるがおなじ宮人をかたらふとき、

て恨みければ、親などもかけてちかはせ給ふ、いみじきそらごと也、夢にだに見ずとなんいふ、い

かゞいふべきといふとき、て、

ちかへきみとをつあふみのかみかけてむげにはまなのはし見ざりきや

〔更科日記〕天りうといふ川の略○中わたりしつ、はまなの橋についたり、はまなのはしくだりし

時は、くろぎをわたしたりし、このたびはあとだにみえねば、舟にてわたる入江にわたりし橋也

〔遠江國風土記傳一濱名郡〕長暦年間、菅原孝標女、更科日記曰、濱名橋下りし時は、黒木をわたした

り〔中略〕是か大崎の橋なり

〔後拾遺和歌集九羈旅〕父のともに遠江の國にくだりて、年經て後、下野の守にてくだり侍りけるに、

濱名の橋のもとにてよみ侍りける、
大江廣經朝臣

あづまぢの濱名の橋をきて見れば昔こひしきわたりなりけり

〔堀川院御時百首和歌雜〕橋

師頼